

安美錦最後の場所は世代交代の場所か  
大相撲名古屋場所観戦雑記

「千秋楽に賜杯を賭けた両横綱の対決」という一見美しそうな終幕となったが・・・、大関全員が休場という不始末は何とも消しようがない。

鶴竜の6度目の、しかも久しぶりの優勝に終わった名古屋場所は、いくつかの見所があった。

<1> 世代交代は具体的に進んできた

関脇以下の力士を、独断と偏見で「若手・準若手・中堅・ベテラン」の四区分して、下表に地位別に並べて、今場所勝ち越した力士を朱書きにしてみた。

	若手	準若手	中堅	ベテラン
関脇		御嶽海		玉鷲
小結	阿炎		竜電	
前頭筆頭～8枚目	朝乃山・明生 阿武咲・北勝富士 志摩ノ海・友風	遠藤・大栄翔 逸ノ城	碧山・正代・ 千代大龍・妙義龍 宝富士・隠岐の海	琴奨菊
前頭9～幕尻	矢後・大翔鵬 貴源治・炎鵬 照強	琴恵光・錦木・輝	松鳳山・栃煌山 千代丸・琴勇輝 佐田の海・魁聖	嘉風・豊ノ島

今場所活躍した力士の特徴のひとつは、「正統派・技巧派力士の活躍」。このところ、「突き押しを中心とした力士の攻勢」が目立っていたが、二極化が進んでいることを感じさせる結果となった。

遠藤の「立ち合いの踏み込みの早さ」「腰の位置の低さ」「前みつを取る早さ」は光っていた。脇を締めて土俵に向かって打ち付けるような出し投げは逸品。何よりも、ひとつの動作をしながら低い姿勢で前進を続けつつ次の動作が始まっているというムダのない動きと、土俵際の残り腰が復活したことが好成績の素となっているように感じた。(右画像：豪栄道を寄り切った遠藤)

遠藤のみならず、若手力士の登場の他に、期待の若手と言われていながら壁にあたっていた力士達の中で壁を突き破りつつある力士が見えてきたのも今場所のトピックスと言える。

同じ小兵力士ではあるが、正攻法で攻める照強と、やや変則的な相撲スタイルの炎鵬の対比が面白かった。これまでも体が大きいことだけが大事なことでされてきた相撲界で、何年かに何人かの小兵の名力士が誕生しているが、「基本の技法」を身に付けた上でないと活躍は難しい。「やたらに体が大きければ良い」という時代が終わるだろうか、しばらく注目すべき現象でもある。

北勝富士の力強い「おっつけ相撲」と、大栄翔の「執拗に攻め続ける突き押し」は見ているだけでも気持ちが良い。叩くことを前提として突っ張りを繰り返している力士もいるが、観客の好感度は低い。

また、負け越しこそしたが、朝乃山・明生・阿武咲などセオリー通りの相撲や外連味のない相撲は注目に値するものだった。四つ身の攻めのポイントをしっかり身に付けている朝乃山、前進一本で後ずさりや下がりながらの相撲は一切取らない明生、はたき落とされても前に攻めたいこうとする阿武咲、これらの力士が近いうちに壁を突き破ってくることが想定できるので、しばらくは目が離せない状態が続くような気がする。

殊勲賞は友風、敢闘賞は照強、技能賞は遠藤・炎鵬。明らかにひとつ時代が動いた感じがする。



## <2> 本当の大関はいるのか

番付上は東西に二人ずつ大関がいるのだが・・・

豪栄道は8日目から休場で、3勝5敗7休。先場所は9勝6敗、直近6場所で53勝27敗10休。

高安は11日目から休場で、8勝3敗4休。勝ち越して身の安全を確保しておいて休場という「逃げ手を打った休場の仕方」と言われても仕方ないような休み方。先場所は9勝6敗、直近6場所で59勝27敗4休。

栃ノ心は6日目から休場で、0勝6敗9休。大関で二場所連続の負け越しで関脇に陥落したが、先場所は10勝5敗を上げて特例で大関に復帰したばかり。来場所勝ち越すことができないとまた関脇に陥落することになる。

貴景勝は、怪我が治まらず今場所は全休。先場所新大関として登場したが怪我で途中休場して3勝4敗8休で、大関としての実績を残す前に関脇に陥落することになった。栃ノ心の場合と同様に、来場所10勝5敗以上の成績を上げれば大関に復帰が可能。

さて、いにしえより大関は力士の最高位で、大関の中でもさらに優れた者に綱を許して横綱とした。つまり大関は「神格の入口」に位置するとされている。現在の規程では「二場所連続して負け越したら関脇に陥落」であり、「関脇に陥落した場所に10勝以上上げれば大関に復帰」となっている。神格の入口に立つ存在なればこその特権が大関を守っている規程なのだが、この規程が問題の素になっていることはないだろうか。

大関の地位にいる力士に大変無礼な表現になるかもしれないが、敢えて触れてみることにする。

一旦大関の地位を手に入れたら、「二場所連続して負け越さなければ」地位を守ることができるので、負け越すと8勝7敗を繰り返していれば良いことになる。また、運悪く「二場所連続で負け越し(休場)してしまっても、次の場所に10勝できれば」地位を守ることができる。

もしも(こんなことはないと思うが)、大関が自己保身をベースにしたらどうなるだろうか。

しかしながら、裏返しにしてみれば「緊張感を欠く原因となりかねない仕組み」と言うこともできる。

## <3> ところで力士の給与は・・・

横綱の基本給与(月給)は約260万円、大関は約216万円、関脇・小結は約156万円、平幕は約120万円、十両は約95万円と言われている。ここに様々な加算金などが加わって、さらに懸賞金やコマーシャルの出演料などで力士の収入が構成されている。

十両入りして関取になると、大銀杏が結えて着るものも変り、これまでの無給から一気に月収95万円になる。力士達が十両を目標に頑張る理由はここにある。

十両から各階段を昇る(昇進)度に、基本給与だけでもどの位アップするのかをまとめてみると、下表のようになる。

昇進形態	十両から幕内へ	平幕から小結へ	大関に昇進	横綱に昇進
基本給増加率	+26%	+30%	+38%	+20%

平幕から新小結になること、関脇から大関になることがどれほど素晴らしいことかは給与の増加率を見ればわかる。ところが、大関から横綱になる場合には思ったほどには増加しない。

関脇までの地位では、一場所毎の成績で地位が目まぐるしく上下するが、大関になれば二場所連続して負け越さなければ地位を保つことができる。

横綱になると過大な責任を負わされて、成績が振るわなければ引退を迫られ、苦勞するばかり。

生身の人間の生き方として考えれば「そこそこの収入が得られるし、大関のままでいいか?」という考え方があってもおかしくはない。(という風に想像するのは失礼かもしれないが・・・)

「横綱になりたいと思っている大関」がいるかないかで随分状況が変わってくるような気がする。

#### <4> 安美錦引退

西十両 11 枚目でこの場所を迎えた安美錦、二日目に新十両（21 才）の竜虎（りゅうこう）との土俵で何度目かの膝の故障、三日目から休場。

そして、引退発表ということになった。40 才を過ぎており、いつその日が来てもおかしくはない状況ではあったが、平成 12 年の新十両の場所から注目して見続けてきたファンとしては、ひとつの幕が下りてきた感じがする。師匠の伊勢ヶ浜（元横綱旭富士）と苗字が同じなのに気がいたら、親戚とのことだった。

技能派力士・技巧派力士と言われてきたが、相撲の基本を隅から隅まで体に覚えさせた上に、一番一番の対戦相手の特徴や癖やその日の心の動きまでを読み取って、にわかに関分の作戦に折り込んでいく。仕切りの間に相手力士の目を見ることが少ない近頃の相撲取りにはまねができない「超絶技巧」だろう。

勝負を終えて土俵を下りると、その日の取り組みを克明に説明してくれるし、その説明がわかりやすいし、ユーモアも交えて親しみを感じる。全取り組みをビデオ鑑賞もしているようで、多くの力士の動き方を掌握しているらしい。技巧派を越えて「相撲研究家」の領域に近い存在と感じさせるものがある。同部屋の若手力士達へのアドバイスはもとより、近頃は他の部屋の若手にも的確なアドバイスをすることもあり、部屋を越えて人望のある人らしい。

平成 5 年旭富士が安治川部屋を承継した後に入門して、平成 9 年に初土俵を踏んだ。安壮富士と兄弟関取としても有名だった。格段での優勝は一度も無いが、殊勲賞 4 回・技能賞 6 回・敢闘賞 2 回、何よりも大物食いで金星 8 個という見事な出来栄。横綱旭国から横綱旭富士に伝承され安美錦に伝承された技能相撲、安美錦引退の場所で同部屋の若手照強が敢闘賞を授与されたのも何かの因縁かもしれない。通算成績は 135 場所で、907 勝 908 敗 55 休、怪我をして休場する日が一日早ければ勝ちと負けが同数になるという珍記録も達成できたのに、残念だった。



以上